



ザンビア編 ⑥

「顔や手足のむくみは要注意」「強い頭痛にも気を付けよう」

吉野川市山川町のNPO法人TICCOがザンビア農村部のモンボシ地区に開設した診療所の近くに歌声が響く。歌っているのは、地域住民でつく

る「安全なお産支援グループ(SMAG)」。歌詞には、妊娠中の危険の兆候として妊婦や家族らが知っておくべき症状などがまとめられている。「ザンビアの人たちは歌や踊りが大好き。母子保健の知識を住民に伝えるには、歌や啓発劇にす

住民に保健教育必要

村の生活

「顔や手足のむくみは要注意」「強い頭痛にも気を付けよう」

国際協力機構(JICA)の事業の一環としてTICCOが2011年1月から養成を始めた。現在、モンボシを九つに分ける「住民保健委員会」ごとにメンバー3人、サブメンバー10人が活動している。TICCOがザンビアで

の田村幸根さん(29)は重慶桑名市出身が説明してくれた。SMAGは妊婦登録から検診、出産に至るまでの過ごし方や注意点について啓発している。ザンビア政府の意向を受け、

生活は貧しい。医療の基底的な知識もまだまだ不足しており、SMAGに宅は、「マシールームハ」と呼ばれるキノコ型のかやぶき屋根の住居が並んでいた。もちろん、水道や電気はない。

取り組む国際協力は、医療施設や学校の建設といったハード面の整備ばかりではない。保健医療分野の人材育成も、事業の大きな柱となっている。

農業者が中心で、自給自所へ向かえない交通事情を痛感する。

Gのメンバーの一人、アルフレッド・ムエンバさん(49)の家に泊らせてもらった。雨期だったため、診療所からムエンバさんの家へ向かう道は川の増水で通行できなくなっていた。妊婦がすぐには診療代までに平均8・8回の

SMAGメンバーのムエンバさん(右端)とその家族。ザンビアのモンボシ地区



主食はシマと呼ばれるトウモロコシを練って作った食べ物だった。これに鶏肉や落花生の葉を煮の上に乗せてくれた。

「もう食べられない。無理ですよ」と断ったとたん、ムエンバさんが真顔になった。「食べられるときに食べなきゃだめ。人は飢えたら死ぬよ」。大規模干ばつが繰り返されるザンビアは、常に食糧不足の危険性をはらんでいる。飽食の時代に生きる日本人として、その言葉が胸に突き刺さった。降りしきる雨の中、土の臭いをかきながら真つ暗な部屋で一夜を過ごした。今から移動は困難だ。もしこの場所に妊婦がいて、家族が妊娠の危険兆候についての知識を持ち合わせていなければ、いざというときに手の打ちようがない。それがモンボシの一般家庭の現状だった。(藤長英之)